

坪谷善四郎書翰・日記にみる一八九四年東京地震・一八九五年茨城県南部の地震

矢田俊文

本稿の目的は、坪谷善四郎が田卷三郎兵衛に宛てた書翰と坪谷善四郎日記に記された一八九四年明治東京地震・一八九五年茨城県南部の地震記事を紹介することにある。

一八九四年明治東京地震・一八九五年茨城県南部の地震記事が記される田卷三郎兵衛宛坪谷善四郎書翰は、新潟大学附属図書館の本田卷家文書の中に⁽¹⁾ある。地震記事が記された田卷三郎兵衛宛坪谷善四郎書翰は次のようなものである。

(史料1)

(封筒)

「越後南蒲原郡田上村

田卷三郎兵衛様

平安侍史

(封筒裏)

「東京牛込区矢来町四丁

坪谷善四郎

謹啓、益御壮栄、奉賀上候、当方一同無事消光罷在候条、御休神願上候、去ル十八日夜十一時頃之地震ハ、稍ヤ強震ニ有之候ヘ共、昨年六月之地震ニ比スレバ甚ド軽少ニテ実ハ差シタル事モ無之候ト存ジ小生方ニテハ。一同戸外ニ出デタル者ナキ位ニ候処、新聞紙記事之仰山ナル為ニ、意外ニ御痛心相煩ハシ、恐縮

千万、幸ニ何事モナク候条、御安心願上候、元来燐寸箱ノ如キ家屋ニ候ヘバ、潰レ候テモ差シタル事ハ有之間敷候ヘ共、元来山ノ手ノ不便ナル代リニハ、イツモ地震ト火事ノ災害少ナキハ一得ニ候条、御一笑被成下度候、乍末御満堂様へ宜敷御附聲願上候、敬具、

一月

廿一日 坪谷善四郎

田卷三郎兵衛様

貴下

史料1の封筒には消印が二つ捺されている。東京の消印は全文が読めないが、もう一つの消印には、「越後田上廿八年一月二十六日口使」とある。この消印から、史料1は明治二十八年に出された書翰であることがわかる。

史料1によれば、明治二十八年一月十八日夜十一時頃地震が起こったとある。この地震の震央は茨城県南部で、マグニチュードは七・二であった。史料1には、明治二十七年六月の地震のことも書かれている。この明治二十七年六月の地震は、明治東京地震と呼ばれる地震で、震央は現在の東京都東部で、マグニチュードは七・〇であった。

この二つの地震については坪谷善四郎の日記にも記されている。日記は、新潟県加茂市立図書館に所蔵されている。次の史料2・3は、地震が記される日

付の日記を紹介したものである。史料2・3は、ともに金原版当日日記を使用して書かれている。

(史料2) ○明治二十七年六月二十日水曜

博文館出勤

此日、午後二時五分、東京大地震、当時会々たまたま内外通信社用ノ為ニ、ルーター電信会社手代松井吉郎・竹村良貞ノ二氏ト共ニ、京橋南鍋町之柳通り三階楼上ニアリ、

(史料3) ○明治二十八年一月十八日金曜

博文館及通信社出勤

此夜、十時五十分、大地震、死傷アリ

史料2によると、明治二十七年六月の地震は六月二十日午後二時五分に起こったことがわかる。筆者の坪谷は、この地震を仕事中、京橋南鍋町柳通り（現在の銀座柳通り）で体験している。史料3によると、明治二十八年一月十八日の地震は夜十時五十分にかけて起こったことがわかる。

坪谷は、封筒にあるように東京市牛込区矢来町四丁に住んでいた。名宛人の田巻三郎兵衛は、新潟県南蒲原郡田上町田上の千町歩地主本田巻家の当主である。坪谷善四郎は、文久二年（一八六二）二月二十六日、狭口村（現新潟県加茂市）に生まれている。よって、田巻三郎兵衛と坪谷善四郎は隣町同士の関係であった。

坪谷は、明治十九年一月、東京専門学校に入り、明治二十一年三月より同校に在学のまま、博文館の社員となっている。博文館は新潟県長岡生まれの大橋

佐平が明治二十年に起こした会社である。坪谷は明治二十一年十一月には、家を東京市牛込区矢来町四番地に借り、明治二十七年には、その年、大橋佐平が創立した内外通信社主幹も兼ねている。この年、坪谷は三十三才であった。

明治二十八年一月十八日地震の三日後、坪谷は史料1を書いた。そこには、明治二十七年六月の東京地震と明治二十八年一月の地震が比較されて記されている。東京で二つの地震を体験した坪谷は、明治二十八年一月の地震は、やや強震であったが、昨年明治二十七年六月の地震と比べれば軽少で、戸外へ出たものもいなくらいであったと記している。

以上が坪谷善四郎の書翰と日記に記された一八九四年明治東京地震・一八九五年茨城県南部の地震記事の紹介である。最後に史料1〜3により明らかにしたことをまとめておきたい。

- ① 明治二十七年六月二十日の地震は、午後二時五分に起きた。
- ② 明治二十八年一月十八日の地震は、夜十時五十分に起きた。

③ 明治二十七年六月二十日と明治二十八年一月十八日の二つの地震を東京で体験した坪谷善四郎は、明治二十八年一月十八日の地震は、やや強震であったが、明治二十七年六月の地震と比べれば軽少であったと感じていた。

本稿で紹介した坪谷善四郎の日記に記された一八九四年明治東京地震・一八九五年茨城県南部の地震記事は史料2と3の程度である。しかし、一九二三年の関東大震災について書いた坪谷の記録はたいへん多い。記事の多さは、関東大震災の被害の大きさだけではなく、坪谷の活動範囲が広がり震災復興にたずさわったことと関係する。関東大震災復興のための坪谷の活動は『水哉坪谷善四郎先生伝』に記されているが、あらためて坪谷の日記から明らかにしていきたいと考えている。

(註)

- (1) 新潟大学附属図書館本田卷家文書(整理番号M4-314)。史料1は、二〇〇六年度の古文書実習で本田卷家文書を整理している際に私が地震史料の研究をしていることを知っている人文学部三回生学生浅野重幸君が見つけてくれたものである。史料1・2・3の翻刻に当たっては、溝口敏磨・原直史氏のご協力をいただいた。史料の傍注は矢田が付したものである。
- (2) 本田卷家については、『千町歩地主田卷家の構成』農政調査会、一九六三年を参照されたい。
- (3) 坪谷善四郎の履歴については、すべて加茂町立図書館講演会編『水哉坪谷善四郎先生伝』、博文館、一九二八年に拠っている。
- (4) 大橋佐平については、稲川明雄『竜の如く』出版王 大橋佐平の生涯』博文館新社、二〇〇五年を参照されたい。
- (5) 坪谷善四郎『大橋佐平翁伝』(一九七四年、栗田出版社、初版は一九三二年)によると、内外通信社は明治二十七年五月五日、京橋区南鍋町一丁目一番地に設置された。史料2の竹村良貞は当時は内外通信社社員。
- (6) 坪谷の活動は、坪谷善四郎「大橋図書館の焼失」(『図書館雑誌』五四号、一九二三年)にも記されている。